

Project
Operation
Sight for
All

POSA 事業報告

No.17

●平成25年度



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA 目 次



理事長より

『人との出会いは そよ風のように すがすがしい心だけを 残して下さい』

POSA理事長 医療法人 輝秀会 理事長 倉富 彰秀 P1

副理事長より

『When in Bangladesh, do as the Bangladeshis do』

POSA副理事長 菊池眼科 院長 井上 望 P2

国際エンゼル協会より

『バングラデシュの人たちの笑顔』

特定非営利法人 国際エンゼル協会 事務局長 東村 悦三 P3

『POSA』

国際エンゼル協会 バングラデシュ責任者 アジズル・バリ P4

ライオンズクラブより

『視覚障害者の闇を開く奉仕活動に感謝して』

神埼ライオンズクラブ会長 田原 英征 P5

アイキャンプ参加者より

『眼科における国際貢献』

林眼科病院 瀧本 峰洋 P6

『アイキャンプに参加して』

くまもと森都総合病院 視能訓練士 吉田 幸代 P7

『バングラデシュアイキャンプに参加して』

てるや眼科クリニック 視能訓練士 照屋 邦子 P10

『エンゼルホームの子供たち』 (株)SUPPLUS 八木 隆明 P13

『私にとってのバングラデシュ』 崇城大学 薬学部 2年 (※2012年12月時点での学年) 江崎 円香 P15

『初めての海外』 佐賀県立鳥栖高校 2年 (※2012年12月時点での学年) 今村 玲南 P16

『発展途上国の現実』 佐賀県立鳥栖高校 2年 (※2012年12月時点での学年) 倉富 菜々 P17

『アイキャンプに参加して』 福岡大学付属若葉高等学校 1年 (※2012年12月時点での学年) 小柳 博那 P18

『アイキャンプに参加して』 沖縄尚学中学校 3年 (※2012年12月時点での学年) 照屋 秀斗 P19

平成24年度事業報告書及び平成25年度事業計画

平成24年度・平成25年度事業報告書 P20

御支援頂いた方の一覧表 P21

POSA理事・監事名簿・POSA会員・POSA規約(一部抜粋)・入会のお願い P22

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『人との出会いは そよ風のように すがすがしい心だけを 残して下さい』

POSA理事長 医療法人輝秀会 理事長

倉富 彰秀



思うところあって医師を志し、思うところあって眼科の道を選んだ。1994年に実家のある佐賀県神埼市で開業して現在に至っている。

縁あって開業翌年の1995年から年に一回ではあるが12月のクリスマスシーズンに眼科医療援助活動を行っている。初めの5年間はインドで、2000年からの13年間はバングラデシュにて活動している。

現在の現地受け入れ団体であるエンゼル協会の創設者である方が小さな詩集を出している。初版発行は1981年なので、もう32年前に書かれた詩集だ。昨年のクリスマス、現地バングラデシュ、コナバリ村のエンゼル協会敷地内にあるゲストハウスで『小さな天使』と名

付けられたその詩集を初めて読んだ。そしてそこでひとつの詩に出会った。

『人との出会いは そよ風のように すがすがしい心だけを 残して下さい』

いつも思っていて何だか分からず、なんとなくもやもやしていた気持ちが吹っ切れ、心が洗われたような気持ちになった。

何か無理強いされて始めたのでもなく、自然な流れでこのような道を歩いていると感じている今日この頃である。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『When in Bangladesh, do as the Bangladeshis do』

POSA副理事長 菊池眼科院長

井上 望



H24年12月に13回目のバングラデシュPOSAアイキャンプを無事に行うことができました。これも多くの方々の御協力があつて行える事業です。長い間のご支援に感謝致します。

思い起こせば初めてバングラデシュに来てから13年経ったわけです。さすがに13年は長い期間です。13年前は「福山通運」とか「山田工務店」等の漢字を車体に残した日本の中古車が数多く走っていました。現地の人は日本の中古車に乗っている事をアピールしたいためにわざと文字を残していたそうですが、今はその様なペイントは見かけません。滞在するエンゼル協会施設の周辺も以前はお店がほとんど無かったのですが、今では大きなバザールがあります。ダッカの自動車交通量も格段に増えて物凄い渋滞です。車の増加に社会的なインフラが追いついていない様です。

13年の年月は私たちがバングラデシュで購入した機械にも故障という負担を与えてきます。白内障手術前検査に使う検査機械で角膜の曲率を測る機械があります。日本では百万円程度するコンピューター内蔵の、自動で測れる機械を使用します。これと同じものを12年前

にPOSAで購入しましたが、今回の滞在時にその機械が故障してしまいました。その機械が無いと患者さんの眼に入れる眼内レンズの度数が測定できません。さあ、困りました。現地の眼科ドクターに対処法を相談したところ、手で測定する機械の購入を勧められました。早速エンゼル協会の方に購入を依頼、幸いダッカの店で即日、しかも5万円という安さで手に入れる事ができました。ただ、日本でも40年前はどの眼科でもこの機械を使っていたが自分は全く使い方が解りません。機械を前にして困っていましたが視能訓練士の照屋さん、吉田さんは問題なく扱え、測定出来たため無事に手術前検査が行えました。

バングラデシュの手術室を見渡してみると日本から持参した機械で何年も動いているものは数えるほどで、長期間元気な機械は現地で購入したもののばかりです。たまにしか使わず、しかもバングラデシュ特有の高温多湿な雨季を毎年乗り越えなければならないのですから、日本仕様の精密機械が故障してしまうのは自然な事なのでしょう。「郷に入りては郷に従え」を実感した今回のアイキャンプでした。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュの人たちの笑顔』

国際エンゼル協会 事務局長

東村 悦三



2000年から始まった「POSA・バングラデシュアイキャンプ」、昨年は1,152名の患者さんの中から白内障手術適応者の107名が手術を受けました。近年は毎年100名余りの患者さんが、わずか3日間でPOSAの医師と現地の医師の協力で手術を受けることが出来ています。多くの貧しい人々が、明るい希望と光を再び手にすることができ、喜んでる様子を目にし耳にします。昨年で13回目となるアイキャンプ、私どもは施設を提供し少しのお手伝いしか出来ませんが、毎年お忙しい中ご協力くださっている「POSA」の先生方に感謝いたします。また、参加者の中には私どもの活動に賛同いただき、学校校舎建設・図書の寄贈・DCEF（発展途上国教育基金）への協力など、たくさんの協力をいただいています。

アイキャンプの日、エンゼルホームの子どもたちは前日決められた配置につきました。患者さんをクリニックへ誘導する子、手術室に連れて行く子、手術を待つ不安そうな人に話しかける子、手術が終わった人の手をとって宿舎まで案内する子、いろんな役目があります。困っている人を助けるという当たり前のことですが、身をもって体験し学んでいます。

本協会の活動も、昨年創立30周年を迎えましたが、たくさんのボランティアのみなさんに支えられての30年です。愛の実践としてのボランティア（人に仕える奉仕）に身を置き、その奉仕の過程で自分を育てていただいています。今後もバングラデシュの多くの人たちの笑顔の為に、ともに協力していきたいと思います。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSA』

国際エンゼル協会 バングラデシュ責任者
アジズル・バリ



バングラデシュを含め、途上国の国々にとって白内障の問題は深刻です。WHO の報告によると、世界人口の2億8千4百万人が目の問題を抱えています。その中で4千5百万人は全盲者です。この現状において白内障手術プログラムは重要な働きをしています。

全盲の人々の90%が開発途上国で生活しています。WHO によると、各地域の全盲者の割合は、東南アジア28%、西太平洋26%、アフリカ16.6%、東地中海10%、アメリカ9.6%、ヨーロッパ9.6%、その他0.2%となっています。この結果に基づき、WHO は約2千万人の人たちが、白内障が原因で失明していると推測しています。

失明の原因は、貧しさ、特に低所得によるものです。調査 (Bangladesh National Blindness and low vision survey-2000) によると、80% の人々が白内障

により視力を失っています。失明者が多いことで、国家の医療負担と社会への影響があることに疑いはありません。

POSA の Eye Camp のお陰で、バングラデシュの農村の人々が手術を受けることができています。家族の負担にならず、また、仕事を続けられています。失明を免れることで家族のみならず、地域、国家にとっても良い影響をもたらしています。

2012 年 POSA や*LIONS Club のみなさんのご協力で 107 人の白内障患者の手術ができたことを、心から感謝しております。

*LIONS...Liberty, Intelligence, Our Nation's
Safety



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『視覚障害者の闇を開く奉仕活動に感謝して』

神埼ライオンズクラブ 会長

田原 英征



昨年暮れのバングラデシュ・アイキャンプお疲れ様でした。

倉富POSA理事長はじめスタッフ御一同様に心から感謝申し上げます。

理事長には眼科Drとしてばかりではなく国際ライオンズクラブメンバーとして、インド・アイキャンプから今日まで18年間も続けてこれ、眼科医療の遅れと貧困で手術も受けられない視覚障害者の方々に無料で奉仕してこれましたことは、多くの視覚障害者に喜びと感動を与えてくださったものだと思います。またそのためには筆舌に尽し難いご苦勞があったものと拝察いたします。

神埼ライオンズクラブとしてもライオン倉富の献身的な奉仕活動を支援するため、国際ライオンズ協会の国際援助交付金と神埼ライオンズクラブの資金を活用しながらアイキャンプを支援しているところであります。

ライオンズクラブと視覚障害者の関わりについて少し述べたいと思いますが、1925年、第9回国際ライオンズクラブ大会において来賓として招かれた盲目の人、

ヘレンケラーが祝辞の中で「ライオンズよ!闇を開く十字軍の騎士たれ」と素晴らしいスピーチをされて以来、視覚障害者を助け、目を守る運動はライオンズの奉仕活動の柱となりました。

さぞヘレンケラーの言葉はライオンズの心を震撼させて奮い立たせたことでしょう。

ライオン倉富がその言葉を率先垂範されていますことに深く敬意を表すものであります。

神埼ライオンズクラブも諸先輩の方々のご精進により、今年結成45周年を迎えることになりますがその記念事業としても、バングラデシュの眼科医療施設の充実のため、ライオン倉富を通して些少の寄付を計画しています。

私たち神埼ライオンズクラブもアイキャンプ活動支援をアクティビティの重要事業として捉えこれからも支援してまいります。

POSAの活動のますますのご発展と世界の視覚障害者の光明が開きますことを心からご祈念申し上げます。ご挨拶といたします。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『眼科における国際貢献』

林眼科病院
瀧本 峰洋



先日、世界各国でアイキャンプを行っている日本の眼科医療団体の会合に参加させていただきました。活動されている地域はバングラデシュ、ネパール、モザンビーク、キリバス、タンザニアなど医療が十分に整備されておらず白内障が社会的失明となり得る国々です。それぞれの団体を率いるどのドクターも、キャンプの立ち上げから継続して白内障手術を行えるようになるまで様々な

苦勞をされてきたことをお聞きし、一人でも多くの白内障患者さんに鮮明な映像を届けたいとの思いと、コッコツと地道に活動を継続されてきた努力に敬服するばかりでした。今回私が2度参加させていただいたPOSAももちろん例外ではなく、倉富先生、井上先生の情熱なくしては成り立たず、今後も私なりに医療活動のお手伝いできればと思っています。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』 くまもと森都総合病院 視能訓練士 吉田 幸代



昨年に続いて 2 回目の参加をいたしました、くまもと森都総合病院の視能訓練士の吉田幸代でございます。昨年同様、今回も術前の検査を担当しました。

白内障の手術の時に必要な検査の一つに、眼軸長の検査があります。眼軸長とは眼球の長さのことで、この長さは人種によって異なると言われていています。昨年参加した時に、同じアジア人といっても Bangladesh の方々のお顔は私達とはずいぶん異なるなあと思いました。調べてみると、Bangladesh に住んでいる方々は主に Bengali 人で、Bengali 人はインド・アリア系

の民族であり南方コーカソイドに属するとのこと。私達日本人はモンゴロイドですので、Bangladesh の方々と私達日本人は異なる人種に属しているということになります。(Bengali 人は Myanmar や Nepal のモンゴロイドと混血しているとも考えられています)

そこで、今回 Bangladesh アイキャンプにて白内障の手術をうけるために眼軸長の測定を行った方々と、日本で私が勤務する病院で白内障の手術を受けられた方々の 1) 眼軸長 2) 使用眼内レンズ度数 3) 年齢・性別について調査し比較を行ってみました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

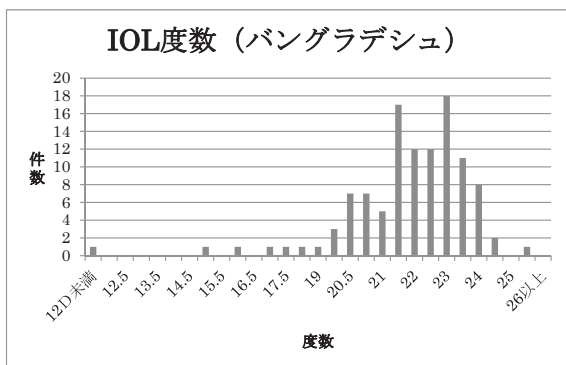
1) 眼軸長について

バングラデシュ・日本の方々の眼軸長を測ってみますと、その平均はバングラデシュ 22.78mm(20.75mmから 27.04mm) 日本 23.4mm(20.94mmから 28.6mm) でした。両国間の差は 0.62mmで屈折値(遠視や近視の度数)に換算すると 1.87Dに相当します。この 1.87D(0.65mm) がどの程度の差かといいますと、「決して大きな差ではないが小さな差でもない・・・そここの差」といったところでしょうか。例えば、1.87D程度の屈折異常では日常生活でのメガネの必要性はそれほど高くありません。ただ +1.87Dの遠視がある方では他の人より早く、40 歳になったとたんに老眼鏡が必要になってきます。また-1.87Dの近視の方では車の運転の時、黒板や映画を見る時にはメガネが必要となってくる程度の屈折異常に相当します。

2) 使用眼内レンズ度数

POSAのアイキャンプでは手術後メガネ無しでもよく見えるように、お一人お一人の目に合った度数の眼内レンズを使用しております。今回の一番多く使用した眼内レンズ度数は 23.0Dの 18 枚で、これは今回の手術の 16%に相当します。使用したレンズの分布を図に示します。

手術の時に使用する眼内レンズは日本から持っていきます。事前に準備すべき眼内レンズの枚数を調査結果から考えてみますと、21.5Dから 24Dまでは 20 枚程度、20.5 から 21Dは 10 枚程度、その他は 5 枚程度を準備していけばよいということが解りました。



3) 年齢・性別について

今回眼軸長と眼内レンズの調査と同時に、手術を受けた方々の年齢と性別も調査し比較してみました。結果はバングラデシュで手術を受けた方の平均年齢は 62 歳(31 歳から 90 歳) 男性 56 名女性 54 名。日本の平均年齢は 75 歳(56 歳から 92 歳) 男性 42 名女性 68 名でした。この結果からバングラデシュで手術を受けられた方は日本で手術を受けられた方よりも平均で 13 歳若く男性の方が多いことが解りました。

検査をしながら気になったことがあったのですが、手術を受けられる方々に 30 歳代から 50 歳代が多く含まれていました。日本では白内障の主な原因は加齢によるものです。そのため手術を受けられる方々も 70 歳以上の高齢者がほとんどです。しかしバングラデシュでは屋外労働に起因する紫外線の影響や、慢性的な栄養不足等の原因もあって働き盛りの白内障患者が多いということです。このように一家の大黒柱が病気になるということは、この国の貧困や不安定な社会情勢に大きな影響を与える一因となっています。

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

まとめますと、今回の調査で 1) バングラデシュの方々の眼球は日本の方の眼球よりも短い 2) 事前に準備すべき眼内レンズの枚数 3) バングラデシュでは働き盛りの白内障手術患者が多い ということが解りました。

以上が今回の調査報告になります。この調査結果を今後の日常診療やアイキャンプにいかしていけたらいいなと思います。最後になりましたが、POSAの活動を支えてくださっている多くの皆様、皆様のご支援に心より

感謝いたします。倉富先生はじめ一緒にアイキャンプに参加した皆様、お世話になりました。皆様とご一緒にできて楽しかったです。私へ参加の機会を与えてくださり、快く送り出してくださったくもと森都総合病院の皆様、本当にありがとうございました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュアイキャンプに参加して』

てるや眼科クリニック 視能訓練士

照屋 邦子



今回初めてアイキャンプに参加させていただきました。以前より井上先生からアイキャンプのお話を伺っていて、いつかは必ず参加したいと思っておりました。しかしながら、普段は病院業務に追われ、ちょうど年末の主婦業にシフトチェンジする時期にアイキャンプが始まるということもあり、なかなか調整できずに数年が経過しておりました。それでも私の中で行きたい気持ちがくすぶっていて、時期を見計らっておりました。2012 年は意を決し、早い時期に優先的にアイキャンプの予定を入れ、ようやく実現することができました。しかも、中学3年生の息子も連れて行くことができました。私達を快く受け入れて下さった倉富先生ご夫妻はじめ井上先生、瀧本先生、POSA のプロジェクトに関わった皆様に深く感謝

申し上げます。

今回のアイキャンプでは看護師さんが倉富先生の奥様だけなので手術の外回りができるように前もって自分のクリニックで手術の流れを把握しておいた方がよいと、井上先生からのアドバイスをいただきました。そのため、旅立つ2ヶ月前から週一回白内障手術を見学しました。主人の経営するクリニックで私は視能訓練士として外来業務のみを担当していたので、手術室のことはスタッフに任せっきりでした。これをきっかけに、スタッフみんなが手術室でこんなに頑張っていたんだということを開業8年目にして改めて知る良い機会となりました。また、今回は、くまもと森都総合病院から優秀な視能訓練士の吉田さんも参加されるのでいろいろ教えてもらえると



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

伺っており、不安を抱くこともなく、2012 年後半はバングラデシュ行きという明確な目標のおかげでワクワク過ごすことができました。

さてさて、肝心のバングラデシュでのお話です。

ダッカの空港ではいったいみんな誰に会いにきたのだろう？芸能人でも来てるの？大勢の人ばかり、じーっとただただこちらを見ている。試しに笑いかけてみても表情を変えずにじーっと見る。見るただただ見る。好奇心満々なオバサンはその不思議な光景に見入って目をキョロキョロさせていたら、息子に服の裾を引かれてマイクロバスに乗り込む始末。

エンゼル協会までの道のりは、またそれはそれは、何をそんなに急ぐのやら、先を争うように走る車・車・車。クラクションはそんなに鳴らさなきゃいカンのか、少し口を半開きにしてみたら歯がガチガチと鳴り、大きな振動の連続で舌を噛みそうになる。目に入ってくる景色は、

市場の路上にもたくさんの人、トラックの荷台には積荷と化した人の山、どれくらい喧騒の道路を走ったでしょうか、しばらくすると、左にハンドルをきり進んで行くと、喧騒は消え、右も左もレンガ工場が続き、その先に今回私達がお世話になったエンゼルホームがありました。エンゼルホームではまさしく天使のように澄んだ瞳の子供達が歓迎の花飾りを首にかけてくださり、あの空港で見た無表情な人達とは全く違う活き活きとした明るい笑顔が印象的でした。

さていよいよ現地での活動が始まります。視能訓練士吉田さんに教えていただきながら術前検査の角膜の曲率半径、A モード測定をしました。吉田さんは英語も堪能でテキパキと検査をこなし、また、エンゼルホームの子供達と日本からの学生さんが患者さんを誘導してくれてスムーズに進めるといきや、角膜の曲率半径の測定器の調子が悪くなり、急遽現地で代替え機をさが



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

してもらうことになりました。 体格のがっちりした患者さんが意外にも臆病で私の手

届いた測定器というのは、私が 25 年以前に最後まで強く捉まえていたのが印象に残っています。
生の頃、学院でしか見たことないアンティ手術室は日本語英語ベンガル語が飛び交い、言葉が
メーターでした。最近の機器はとても使い易いですが、誰かしさを抱えながらも、医師・介助者・患
もが簡単に測定できるのに比べて、このケネディカター体となって願いを遂げる素敵な特別な空間
は検査者の調節力が介入し過ぎて、なかなか正確な測

定値が得られない。強い調節力を持ち得た者ばかり同行した学生さん達が本当に自然に自らも楽し
生の頃は苦手な検査の一つでしたが、年齢と共に調節ンティア活動をしていた姿にいまどきの若者
力が衰退し、近用鏡（老眼鏡とは言いたくない頼り）も使用感しました。

する年齢になると、画像をピッタリ合致させる事ができなくなりましたが、私達を心から歓待してくださり、
ようになっていました。「老兵も役に立つ毎日々美味いお食事と整えられた宿舎を提供してくだ
と、ほくそ笑むのでした。 さった、エンゼルホームの皆様、お世話になりました。

手術室は倉富先生の奥様が主体となっていて長年ありがとうございました。また、同行したPOSA
少しずつ改善されてきたのでしょうか、想像していたよりも皆様、またご一緒したいです。ありがとう
はるかに充実した設備でした。手術室での仕事は殊更。

介助と患者さんの手を握ったりしました。立派なお髭の



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『エンゼルホームの子供たち』

株式会社SUPLUS

八木 隆明



「やっとバングラデッシュに行ける！」社内でアイキャンに参加することが決まったときの嬉しさは今でも覚えています。行ったことのない国へ行ける喜びも大きかったのですが、今までは先輩から土産話を聞いていただけだったアイキャンに、実際に参加できることがなによりも楽しみでした。

大学時代は中国へ留学し、東南アジアの一人旅などもしていた私は、環境の違いには慣れているし、驚くことはない和高を括っていましたが、ダッカ空港からコナバリまでの道程は驚きの連続でした。13年前の中国とは比べ物にならない程の喧騒と交通量、足場が竹でできている建設中のビル、大渋滞の隙間を縫って歩く人々。色々なことに感激しずっと写真を撮っている間に、コナバリのエンゼルホームへ到着していました。

到着して車を降りると、子供たちが総出でお出迎えしてくれました。エンゼルホームはこれまで見てきた景色

とは別世界です。緑豊かで、建物もしっかりと掃除が行き届き、宿舎には清潔なベッドと毛布、こんなに環境の良い場所に泊まれるとは道中からは想像できませんでした。子供たちがくれた手作りのレイの香りに癒されて、セレモニー会場に向かうと、子供たちが歌や踊りで私たちを温かく歓迎してくれました。みんなの澄んだ目が今でも印象に残っています。

セレモニーが終わると子供たちは早速外へ出て遊び始めます。男の子も女の子も元気に走り回り、キラキラした瞳で「ブラザー！ブラザー！あの木まで駆けっこしよう！」、「バトミントンやろう！」と日本から来た私たちはひっぱりだこです。その日はくたくたになるまで遊び、美味しく夕飯を頂き、ぐっすりと眠れました。

翌日は朝から、私にとっては初のアイキャンが始まりました。医療の知識が無い私は簡単なお手伝いしかできず、あとは専ら子供たちとのスキンシップです。みんな



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

な昨日とは打って変わって、目の見えない患者さんの手を引き、階段の上り下りを手伝ったり、検査の時も積極的に患者さんへ私たちの代わりに「もう少し上を見て！そのままのまま！目を動かさないで！」と指示をしてくれます。やらなきゃいけない、やらされている、という素振りは全く無く、素直に目の前の人に必要なことをしている子供たちを見ると、「自分の子供もこうあって欲しい。」と、切に思いました。

ここの子供たちは本当にパワフルです。一日中遊びます。お手伝いもします。お手伝い中でも遊びます。終わったらもっと遊びます。もちろん喧嘩もするし、友達をからかったりもします。日本ではいじめになってしまいそうなことも、「いじめられる側」の子がいないので、いじめになりません。そしてここの子供たちは泣きません。痛くても、悔しくても、泣いて人に訴えるのではなく、自分で解決しようとしています。

遊び方もいろいろです。クリケットやバトミントン、サッカーに夢中な高学年の男の子達や、ずっと駆けずり回っている低学年の男の子。お花を摘んでいる女の子。夜はみんなでTVを見たりもします。私が持って行ったジェ

ングもルールは全く無視でしたが大人気でした。もちろん、日本に比べて遊ぶ物は少ないですが、なんでも遊びに変えられる逞しさを持っています。一緒に赤い木の実を集めて並べ、地面に字を描いたのが印象的でした。まさに、子供のあるべき姿をバングラデッシュで見ることができました。

4日間のアイキャンプを終え、帰る日になると、「ブラザー、もう帰っちゃうの？さみしいよ。」「次はいつここに来れるの？」と別れを惜しんでくれました。翌年もアイキャンプに参加できるよう、エンゼルホームの皆さんにまた会えるよう、仕事に励みます。そしていつかは妻と息子連れて、家族でアイキャンプに参加することが私の目標になりました。

最後になりましたが、貴重な体験をさせていただきました、POSA 倉富先生、井上先生はじめアイキャンプでお世話になった方々に改めて感謝申し上げます。

ありがとうございました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『私にとってのバングラデシュ』

崇城大学薬学部2年

江崎 円香



以前までのアイキャンプでは多くの患者さんや子供たちと出来るだけ長い期間共に過ごし、より多くの笑顔を作りたく、前期後期とも参加をしていました。しかし、今年は大学の授業の関係で、後期だけ参加することになりました。毎年、バングラデシュを経つ前に「もっと何かが出来たのではないかな。まだバングラデシュに残りたい。」などと、考えていたにも関わらず、これ以上期間が短くなつては、やりたいことが思うように出来なくなるのではないかと、不安を抱きました。そしてまた、今年のバングラデシュで行動できる期間が3日間だけだった為に、今年は行くかどうか正直悩みました。しかしながら、やはり私にとってバングラデシュのない年など考えられず、すぐにアイキャンプに参加すると結論を出しました。短い期間で、いかに効率良く多くのことが出来るのかと、渡航前まで色々と考えていました。そして、今

年は初めての後期組としての参加でしたので、渡航などを自分一人でこなさなければならなく、色々と不安がありました。その為、今年はいつも通りワクワクもありましたが、不安と心配が一杯のアイキャンプとなるであろうと思っていました。しかしながら、私にとって今回のアイキャンプは今までの中で一番充実したものとなりました。何故かと言いますと、今回は多くのプレッシャーを与えられることにより物事をよく深く考え、本当に自分がバングラデシュで何を行っていきたいかを見出すことが出来ました。今の私にとって、アイキャンプとは世界の現状を学ぶ場であり、また、自分自身を改めて見つめ直すことの出来る、一年に一度の大切な機会だと思っております。この様に充実したアイキャンプを過ごせたことは、スタッフの皆様のお陰だと思っています。心から感謝申し上げます。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『初めての海外』 佐賀県立鳥栖高校2年 今村 玲南



私は今回初めてアイキャンプに参加させていただきました。参加理由は、将来海外留学をしようと考えているので、高校生のうちに海外を体験しておきたいという気持ちからでした。

アイキャンプ参加にあたって、テレビやインターネットでバングラデシュについて調べていました。治安が悪かったり、不便なことが多い国だと思っていました。しかし実際は、そんなに不便なこともなく、アイキャンプの場となるエンゼルハウスに着くと、スタッフの人たちは優しく、子供たちもとても元気が良く、人懐っこい子ばかりで、不安などすぐになくなりました。

白内障手術のボランティアとはどんなことをするのか、期待と不安に満ちていました。そして、予想していたものとは全く異なり、日本では絶対にありえない、何も資

格を持っていない普通の高校生の私がオペ室に入り、先生に手袋を渡したり、レンズを持ってきたりなど手術のお手伝いをさせていただきました。無知な私に手とり足とり教えていただき、2・3日すればなんとかスムーズにできました。また、後半はボランティアスタッフの人数も減り、私たち高校生が検査をしたりと少し大変でしたが、とても充実していました。

バングラデシュで体験してきたことは、とても刺激的で日常生活では味わえないような出来事がたくさんありました。最終日には高熱を出してしまい、たくさんの方々に迷惑をかけてしまいましたが、全ての事が海外留学への自信に繋がりました。このような機会を頂き本当に感謝しています。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『発展途上国の現実』

佐賀県立鳥栖高校2年

倉富 菜々



今年で7回目のバングラデシュへのボランティア活動。まず着いて一番に思ったことは、物乞いをする人が明らかに少なくなったという事だ。「居ない」と言っても過言ではない位だった。私が初めてバングラデシュへ来た時、渋滞で乗ってる車が止まる度に窓を叩いてお金をくれと訴えてきた人達は今どこに居るのだろう。日本で何一つ不自由することなく、平和な毎日を過ごしてきた私にとってそれはとても衝撃的だった。

物乞いが少なくなった背景には産業や社会そのものが発展したことがある。バングラデシュはインドに隣している国だ。今インドはものすごい勢いで発展している。見かけは良いが、その中で起こっている深刻な問題は貧富の差が縮むことなく広がっているということだ。事業に成功した人は一気に稼げるが、それ以外の人は相も変わらず輸出する為の物をつくるのに安い賃金で雇われている。平等に近づいていかなければ発展する意味は無いと私は思う。

しかし、バングラデシュで物乞いが少なくなった、居なくなったということは、貧富の差が多少はあれど、ものすごく広がっている訳ではないという事を示唆している。昔のバングラデシュをもう見れないのは寂しいが、発展したバングラデシュをこれから見れるのはとても楽しみだ。

そして今回は今まで行った事のない新たな試みをし

た。それは私達がヤギのつがいを買ひ、貧しい村の方にプレゼントし、そのヤギから乳をとったり、子供を生ませたり、食べたり…と良いサイクルを送れる為の一步目を踏み出す手伝いだ。片道車で四時間というとてもハードな移動だった為か、車酔いをし皆に迷惑をかけたながらも無事帰ってきた。

しかし、その村は想像よりはるかにのどかで、皆で協力し合って平和な様に見えた。次行こうなら、もっと身近に居る厳しい環境下におかれている貧しい方からはじめての方が良いという新たな課題が見つかったので、結果オーライだ。

また、今回は人数不足の為初めて術前検査の手伝いをするようになった。私自身これまでは手術室に入り、指示を受け動く!といういわば誰にでも出来る作業をしてきた。しかし今回は患者さんの目を手術するにあたって目に入れるレンズの度の強さを決めるという大切な検査をするということだった。不安もあったが、視能訓練士 (ORT) の吉田さんや照屋さんに優しく指導して頂いたおかげでミスなく行えたので少し自信がついた。

私はこれから世界はさらにグローバル化が進むと予想している。この経験と体験をさらに武器とし、これから先想像もつかない出来事があっても冷静に対処出来るよう日々志を持つ人間となって世界で活躍していきたい。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』 福岡大学付属若葉高等学校 1 年 小柳 博那



今回バングラデシュに行く前からわくわくしていて、すごく楽しみにしていました。町がどう変わったのか、4年前とは何が違うのか早く見たい気持ちが強く、当日はすごくそわそわしていました。

バングラデシュに着いて驚きました。4年前はお金を持っていない人や、病気を持っている人が、外国人が乗っている車を見つけると、すぐに駆け寄り持っている物を売ったりしていました。しかし今回行った時には、

そんな人たちが減っていました。

私はこの4年間でなにがあったのかとても興味を持ったので、これから調べてみようと思いました。これまで3回訪問して、私は将来人の役に立てる人になりたいと強く思いました。

できればベンガル語を話せるようになってまたバングラデシュに行きたいです。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

沖縄尚学中学校3年

照屋 秀斗



僕は、今回初めてアイキャンプに参加しました。パングラデシュに行く前は、人が多いということは知っていましたが、詳しい状況は全然知りませんでした。だから、現地に着いたらたくさんのことに驚かされました。そして、ちょっとしたカルチャーショックがありました。道端でシンナーを吸っている子供たちがいたりしたので、ちょっと不安もありました。

しかし、エンゼルホームに到着すると子供たちは皆きれいな瞳を輝かせ、可愛くて元気いっぱいとても面白くて、言葉の壁などあまり感じることなく、いっぱい遊びました。とても楽しかったです。

また、事情で旦那さんをなくした女性達が住む農村に、ヤギをプレゼントしに行くという活動もしました。国

が変われば文化や人々の暮らしもいろいろあるんだなあということがわかりました。

いろいろな体験をさせてもらった中でも一番貴重な体験が、白内障手術の手伝いです。ガーゼや手袋を渡したりするなど簡単なことでしたが、日本では絶対できないようなことを経験できて緊張しましたが、とてもうれしかったです。近くで手術を見ていて、次々と手術をしている先生方が、どれだけすごいのか実感しました。とてもかっこよかったです。

今回、本当にたくさんの貴重な体験をしました。POSA の皆さん、エンゼル協会の皆さん、たいへんお世話になりました。ありがとうございました。



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



平成24年度事業報告



〈バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施〉

実施期間：平成24年4月1日から平成25年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医及び現地助手

看護師 1 名

視能訓練士 2 名

一般参加 7 名

倉富亜由美

吉田 幸代

江崎 円香

八木 隆明

倉富 菜々

照屋 秀斗

照屋 邦子

柴田 一馬

今村 玲南

小柳 博那

対象患者数：107名

〈バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布〉

派遣期間：平成24年12月20日から平成24年12月27日まで

実施期間：平成24年12月20日から平成24年12月27日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：

眼科医 3 名

井上 望

倉富 彰秀

瀧本 峰洋

活動内容

今回バングラデシュアイキャンプも13回目となりました。現地の眼科疾患の症例及び1152名の患者さんを対象としたスクリーニングアイキャンプ及び107名の白内障手術を実施しました。

国内啓発活動

バングラデシュアイキャンプへの寄贈品、募金、参加の呼びかけ

バングラデシュの現状についての啓発活動

平成24年度事業報告書

平成25年度事業計画

〈バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施〉

実施期間：平成25年4月1日から平成26年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医師及び現地助手

〈バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布〉

派遣期間：平成25年12月19日から平成25年12月26日まで

実施期間：平成25年12月19日から平成25年12月26日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション（IAA）本部

クリニック施設にて

派遣員：日本からの眼科医師及び看護師

現地眼科医及び現地助手

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



温かいご支援ありがとうございました。

平成24年4月～平成25年3月

敬称は省略させていただきます。(順不同)

紙面の都合上、掲載されていない方もおられます。ご了承ください。



寄 付 者

松本 アヤ
松本 いく子
江藤 アヤメ
高濱 結樹
笛木 照江
古儀茶道藪内流東京支部鰐部社中
芥川 泰生
井上 望
小森 哲範
野口 守
毛利 伊津子
吉田 幸代

医療法人 世戸医院

小田 英夫

くらとみ眼科医院患者様一同

菊池眼科患者様一同

タオル 八谷 克幸
香月 富士雄
中園 富子



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA理事・監事名簿



理事長	倉 富 彰 秀	(医療法人 輝秀会 理事長)
副理事長	井 上 望	(医療法人 菊池眼科 理事長)
理 事	橘 光 幸	(橘商事 代表)
	檜 本 純 一	(大坪内科医院)
	野 口 守	(萬永堂 代表)
	林 敢 為	(国際ライオンズクラブ 337-C地区 名誉顧問)
監 事	末 永 博 義	(末永司法書士事務所 代表)
	田 中 雅 美	(田中雅美税理士事務所 代表)

(敬称略・五十音順)

POSA名誉会員

名誉会員	古 川 康	(佐賀県知事)
	中 尾 清一郎	(佐賀新聞社長)

(敬称略・五十音順)

POSA一般会員

芥川 泰生	(株)神埼薬局	高橋 良太	秀島 正博	吉田 幸代
(株)アステム	倉富 亜由美	瀧本 峰洋	福島 武	与那嶺 豊
東 キヨ子	財部 貴資男	田中 清隆	堀 秀行	
伊崎 祐介	柴田 一馬	田中 博都	松本 博	
井上 香奈子	杉本 拓也	田邊 樹郎	毛利 伊津子	
宇野 光次	杉戸 正和	照屋 邦子	(株)毛利工務店	
江崎 円香	世戸 憲男	(株)日本点眼	森岡 千鶴子	
江原 信子	参天製薬(株)	八谷 臨	安谷 久美子	
大島 博	高橋 雄二	原 康夫	山口 克宏	

(敬称略・五十音順)

POSA (ポサ) 規約 (一部抜粋)

(目的)

第3条 本会は、眼科衛生学に関する知識の普及及び白内障・緑内障に対する研究・ボランティア活動を行い、視覚障害者の減少に寄与することを目的とする。

(入会金及び会費)

第7条 正会員は、入会金壹万円、及び年会費壹万円を納入しなければならない。

POSA一般会員入会を随時受け付けております。ご連絡下さい。(POSA事務局 田中)

ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



Project Operation Sight for All

POSA 事務局

〒842-0002 佐賀県神埼市神埼町田道ケ里2435-1

医療法人 輝秀会 くらとみ眼科医院

TEL : 0952-52-8841 FAX : 0952-52-8765

ホームページアドレス <http://www.posaoffice.net/>

E-mailアドレス posa@train.ocn.ne.jp

2013年8月発行